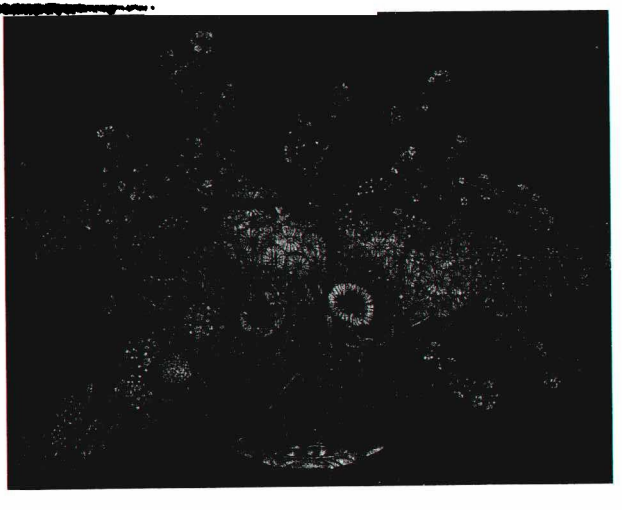
後の花時計

遠藤周作

館
図書
院
学
書
章



文藝春秋

最後の花時計

一九九七年一月二十日　第一刷
一九九七年三月二十日　第三刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　遠藤周作
発行者　和田宏
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）三二六五―一二一一
印刷所　精興社
製本所　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい

© Shusaku Endo 1997 Printed in Japan ISBN4-16-352470-3

目次

医者ゆえの迷信　7
看護婦さんにもっと光を　10
失われた正月風景　13
癌＝手術の定説を覆す　16
「看護する悦び」とは　19
企業進出と米の反日感情　22
視聴率より〝感動〟を　25
羨ましい死にかた　28
若ノ花の披露宴　31
もう目くじら立てまい　34
日本大使館の怠慢　37
病院の見舞について　40
作法について　43
集団心理の恐ろしさ　46
浪人諸君へ　49
あわれな友人の死　52
小泉信三先生を想う　55
執筆の苦労　58

人間のもろさ　61
日本のミュージカル　64
贋作の迷惑　67
村松剛の死　70
逸見さんの手術　73
編集長の苦労　76
奥ゆかしさを失った日本女性　79
人生の意味　82
昔の作家　85
遠藤フッド　88
荷風の日記　91
白骨街道　94
わからないこと　97
日本人の鎖国根性　100
吉行淳之介の死　103
池波正太郎氏の随筆　107
「あの人たち」は今　110
それでいいのかしらん　113
読者からの手紙　116
NHK大河ドラマ　119
蔣介石の寛大さ　122
社会党の変節　125
完全看護制への疑問　128
看護婦さんの待遇改善　131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

うまさの決め手　134
インフォームド・コンセント　137
金賢姫の手記　140
物騒な世の中　143
忘れられぬ共通体験　146
老いの辛さ　149
殺人の心理　152
人間の二重性　156
イヤな時代　159
いい時代劇を見たい　162
「文化省」設立のすすめ　165
見ごたえのある番組　168
早く助け出して　171
税金の使い途示せ　174
震災対策テキパキと　177
匿しておいた方がいいこと　180
神戸への愛惜　183
映画「深い河」　186
死亡欄に思う　189
震災と日本人のモラル　192
桜は鏡　195
最後の趣味　198
宇宙棋院　201

装画　丹阿弥丹波子
ＡＤ　木本百子

最後の花時計

医者ゆえの迷信

血圧の高い知人が脳血栓で倒れた。
不幸なことに明日、病院に行こうという前日のことだった。
彼は現在のところ、全身が不自由で、言語も言えず、食事も自力ではとることができない。気の毒な限りだ。
こういう知人が私にも僅かだが他にもいる。元気な時はダンディだった男が一瞬にして不自由な体となり、言語障碍で苦しんでいる。
私は何度か手術を受けた身だが、こういう知人のことを考えると、自分がまだ幸運だったと思わざるをえない。
神戸の中学時代からの友人で医者になった男に電話して、
「何か予防方法はないのか」
とたずねると、彼の返事が意外だった。
「方角の悪いところに引っ越したら、あかんで」
はじめ、私は彼が何を言っているのか、わからなかった。聞きかえすと、

「俺の友だち、三人とも悪い方角に引っ越して、ようないんや」
と言う。
電話をきって可笑しかった。医者である彼が医学とはまったく関係のない、いわば非科学的な、迷信じみたことを言ったからである。
しかし、しばらくすると、あの男も、医者であるがゆえに、あんなことを口にしたのかと思えてきた。
医者であるから、我々素人以上に多くの患者の死を見てきている。そして医者であるから、現代医学の限界がわかる。
治しやすい病気、治しにくい病気はとも角、治しにくい病気にかかる患者の運、不運や人間の持って生れた寿命についても、経験上、考えざるをえなかったのであろう。
どんなに健康に気をつけても、事故で死んでしまう人がいる。
老年になると、よくわかるのだが、不幸や病気は突如として背中から切りつけてくるものだ。それは極端にいうと、防ぎようのないものかもしれない。医者といえども予知できぬ場合も多いだろう。
その結果、私の友人の医者も、
「方角の悪いところに引っ越したら、あかんで」
という、きわめて非科学的な発言をせざるをえなくなったのだろう。逆にいうと彼は開業

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

医として身をもって医術の限界を体験しているのだ。

我々、素人は病気になっても、医者にかかれば治るという楽観的な気持が心の何処かにある。

しかし医学の能力やそのカラクリを知っている当の医者が病気になった時は我々より不幸な気がしてならない。

なぜなら、彼は自分の症状がどういう方向に行くか、どういう可能性を持っているかを承知しているだけに、我々のように楽観的になれないからだ。

「方角の悪いところに引っ越したら、あかんで」

という彼の言葉が私にはひどく印象的だった。

看護婦さんにもっと光を

看護婦さんの問題がさまざまに論議されている。そのなかで大きな問題のひとつは、今の若い女性のなかには看護婦さんのなり手が少ないということだろう。

入院した経験のある方なら誰でも若い看護婦さんたちが嫌がりもせず、普通の娘なら嫌がる仕事をしてくれるのに感謝するだろう。身内でも肉親でもない老人の体を洗ったり、歩行を助けてくれたり、その他さまざまのことに手を貸してくれるのを見ると、心の底から「偉いなあ」と思わざるをえない。

そういう意味で看護婦さんの待遇を改善してあげていいと私は平生から考えている。

それはたんに経済的問題だけではなく、勤務状況の改善ということだ。

ふしぎに思うのだが、大病院のなかには夜勤の看護婦さんが勤務を終えたあと、食事をする食堂も経営していない所がある。また疲れを休めるため入浴をする風呂も作っていない所もある。

ただでさえ赤字の今の大病院や大学病院では看護婦さんのため、こういう施設を設けることは困難かもしれぬが、夜おそく寮に戻っても食事すら自分で作らねばならず、入浴もまま

ならぬ看護婦さんの話をきくと、気の毒になる。

というのはタクシー会社や多くのテレビ局では夜半、仕事をすませて社に戻る人のために食堂があり、入浴ができ、仮眠をすることも可能になっているからだ。

タクシー会社やテレビ局でできることが、なぜ大病院では不可能なのだろうか。こういう形での看護婦さんの待遇改善を考えたことはなかったのか。

患者の眼から見ても、看護婦さんの仕事はかなりの労働である。勤務時間の問題だけではなく、患者の生命をあずかるという意味ではデスク・ワークのOLとはちがう。

私が知る限りでも、夜間など患者のナース・コールが何回もなり、そのたびごとに廊下を走る看護婦さんの足音がする。重症の患者さんがピンチを訴えているのだ。そういう仕事は患者の生命に関わるものだけに看護婦さんに並々ならぬ緊張感を与えるだろう。かなりの労働の上に、いわゆる三Kといって若い女性の嫌がる仕事も彼女たちには待っている。

きたない物を扱うことも敢えてやらねばならない。患者の菌の伝染を受ける危険性にも曝されている。私は若い娘が看護婦さんになるのは、どういう使命感に燃えているのかとふしぎに思い、彼女たちにたずねたことが何度もある。いずれにせよ、看護婦さんになる娘さんたちにはそれだけで敬意を払わざるをえない。

しかし患者の眼から見ても、看護婦さんには看護以外の雑用が多い。書類の記載や整理などをナース・センターでやっているのを見ると、そういう事を別の人がやれば、看護婦さん

は純粋に看護だけに専心できるのに、と思わざるをえない。そういうことも待遇改善の上では考慮してよいだろう。

いずれにせよ、素人の眼から見ても、夜半や朝がたまで働いた看護婦さんに食事をする場所もなく、風呂場もないのは実に気の毒だ。

深夜、寮に戻っても、もう寝ている同僚に気がねして彼女たちは入浴もできず、食事の支度もできず、インスタント・ラーメンをすするという。看護婦さん不足の原因解消もこういう生活状況の改善から始めるべきだ。

失われた正月風景

幼、少年時代の元旦が文字通り、印象が強かったのは、本当に新年を信じることができたからだろう。

新年とは何事もすべて新しく再生するという意味で、顔を洗う若水も膳に出る餅も、書き初めも羽子板もすべて子供の私には新鮮だった。私は幼少年時代を満州の大連で過ごしたが、そんな中国の日本人街にも獅子舞が来たり、猿まわしが姿を見せたのを今でも憶えている。きっと、あの頃の日本人にはまだ元旦は重要な意味を持っていたのだろう。

少年時代に買ってもらった雑誌はいずれもたくさんの付録と称するものがついていて、それを手にするのが待ち遠しくて雑誌が書店に並ぶと、わくわくしながら買ったものだ。今、思うといずれも他愛もないものだったが、子供心を刺激する色々な付録があった。

夜になると従兄弟たちや近所の子が来て、百人一首をして遊んだ。火鉢の網の上に餅をおき、それが膨れるのを待った。そういう遊びは正月三日間だけにやるものだと思っていた。

玄関には名刺入れがおかれ、元旦を祝いにきた人が名刺をおいて帰っていった。なかにはわが家のお節料理をさかなに酒を飲む客たちもいた。そういう風景が普通の家庭の正月風景

だった。

あれから長い歳月がたったが、右に書いたような正月風景は、今の東京では見当たらない。息子夫婦は贅沢にも三日間をホテルで過ごすようで、孫たちもそのホテルのゲーム・センターで遊ぶのを正月と考えているようだ。正月はすべてが新しく再生する大事な日ではなくなり、たんなる休日と変ったのである。正月の休みを利用して外国に遊びに行くなど、昔は考えられなかったものだ。外国に行くことは日本人の大半にとって夢のような大事業だったからである。

留学時代、私が元旦を送った外国は、フランスのリヨンであったが、それは日本人学生にとって寂しいものだった。学生寮の友人たちは全員、故郷に引きあげていて私はガランとした寮の一室で、寒いわびしい三日間を過ごした。

元旦よりクリスマスを祝うフランスでも、正月三日間は休みだが、ほとんどの商店が店を閉じている。閉口したのはレストランも閉じていることだった。パン屋から買ってきたパンとソーセージを寮の部屋で一人、かじりながら、私は日本の正月をひたすら懐かしく思い出したものである。

現在の日本の正月が私の少年時代にくらべて、あまりに違ってきたので、懐旧の情にかられて私は例年の如く江戸旧名所めぐりをやっている。江戸旧名所とは浮世絵などに出てくる待乳山（まつちやま）とか、俳人のよく集まった三囲（みめぐり）神社である。そういう場所も初詣の客はあまりなく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong